

豊かなスポーツライフの実現を目指した資質・能力を育成する保健体育の授業実践と SSRの効果的な運営と支援の在り方

田村市立船引中学校
教諭 國友 靖展

1 はじめに

以下では、筆者が実践してきた2つの事例を紹介する。

1つ目は、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む」指導の実現を目指して実践した保健体育科の授業である。本事例は、第2学年陸上競技（長距離走）で実施した。多くの生徒たちが長距離走に抵抗感を抱く中で、長距離走の新たな魅力や楽しさを実感させたいと考え授業を展開した。

2つ目は、スペシャルサポートルーム（以下：SSR）専任教員として、SSRの効果的な運営と支援の在り方について実践研究してきた事例である。

2 保健体育科の授業実践【2年生 単元 陸上競技（長距離走）】

（1）実践の内容及び方法等

保健体育科（体育分野）の最大の目標は、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することである。本実践では、その基盤となる体育・スポーツを通じた論理的思考力・コミュニケーション能力を身に付けさせるために、既習事項等を活用しながら、仲間とともに課題解決に取り組む指導を実践した。

① 既習事項を起点にした授業づくり

既習事項は、前時の学習はもちろんのこと、学年や単元等の枠を超えて、生徒が学習してきた知識や技能、考え方、発見等と言える。一方で、既習事項であるにもかかわらず、生徒の理解が浅いこと、定着していない場合もある。そこで、教師が「生徒の学び」をみとり、生徒の学びを価値付けて既習事項として活用し、それらを起点に論理的思考力を高めていくことにした。

② 「仲間とともに」課題解決する学習課題・場面

効果的な「対話的な学び」を成立させるためには、生徒たちが「他者と対話すること」、「他者と協力して解決すること」、「他者と知識を共有し新しい知識や考え方を創造すること」に必要感を抱かせることが重要である。したがって、1人ではなく、2人以上であるからこそ解決できる学習課題を設定し、それぞれがコミュニケーション能力を発揮して学習に取り組める教材を提示することにした。

（2）研究の実際

① 既習事項を活用した授業構想

単元の前半では、長距離走の「苦しさ」「辛さ」の印象から抵抗感を抱く姿、仲間とチームになって走ることでリラックスして楽しそうに走る生徒の姿が見受けられた。そこで、単元の後半では、目標タイムの近い生徒でチームを構成し、互いにサポートし合いながら走ることで、長距離走の単調さを解消させたいと考えた。さらには、走りの実感（このくらいで走れそう、これでは速い）を踏まえて、自分の目標ペースを設定することで、自己の感覚や体感を言語や数字として表現させ、「自己との対話」を通して、論理的思考力を高めていきたいと考えた。

② 仲間とともに課題解決

3時間目では、「楽に走るためには何が必要なのか」といった問いを投げかけ、「ペース」を維持するために仲間と協働する必然性をもたせることにした。協働を前提とした中で、チームで「上げ下げ走」「一定走」の2つの練習方法にチャレンジし、実感したペースの感覚やペース配分のポ

イントを、仲間と共有できる機会を設定した。2つの集団走を通して、仲間とペースを合わせたり、仲間のアドバイスでペースを調整したりすることで、長距離走や走り方の新たな視点を得ることができていた。

(3) 成果と課題、今後の取組の方向性

○ 仲間との協働を通して、「できる」「わかる」を実感できた生徒が数多く見られた。その一例として、運動が苦手な生徒は、目標タイムを遅めに設定していたが、仲間との話合いや仲間からのアドバイスを受けて、遅すぎることに気づき、設定ペースを改善することができていた。集団走のアドバイスや声掛けを通して、支える側・支えられる側の両方を経験し、「する・みる・支える・知る」の多様なスポーツとの関わり方の中で豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の高まりが見られた。



○ 多くの生徒たちが、前時・本時・次時と各時間の関連を意識して学習することができていた。特に、まとめでは、本時を通して自己の体力の状況を体感的に捉え、それらを生かして次時に向けての学習課題や新たな目標を設定する記述が多く見られた。毎時間の授業をより系統的で、連続的なものにすることができた。



△ 教師がリードする授業展開によって、仲間とともに課題解決に取り組む機会を奪ってしまった。生徒自身に学びを委ね、教師がコーディネーターとしての役割を担うようにしたが、より協働的な学習によって「できる・わかる」を実感させるようにしていきたい。

3 SSR専任教員としての実践

(1) 実践の内容及び方法等

SSR設置校としての役割や機能を最大限に発揮するために、どのような運営と支援が効果的であるのかを追究・検証していきたいと考え、本実践をスタートさせた。

本実践では、SSRの実態や現状を分析・整理するため、SWOT分析の手法を用いて実態把握を行い(図1)、その結果を踏まえて、本実践の方策を構想した(図2)。本校のSSRでは、「多くのSSR利用生徒が、教室復帰や高校進学の実現を目標に前向きに生活しようとしていること」、「目標を達成するまでに、あと一步の生徒もいれば、しばらく時間が必要な生徒もいること」がわかった。SSRの強みや特色を使って機会を活かしたり、生徒個々の課題を理解し、SWOT分析での脅威(Threat)による影響を最小限にしたりするための戦略として、3つの柱で築く「架け橋プログラム」を実践し、SSRの効果的な運営と支援の在り方を検討することにした。

(2) 研究の実際

① 1つ目の柱(土台)「個別のアセスメント」

一人一人の生徒に対する理解を深め、指導・支援の方向性を決めるために、より詳細な「個別のアセスメント」を実施することにした。その際に、対象生徒の不応の状態だけでなく、対象生徒らしさやよさを重視して捉え、下記の2つの柱である「居場所づくり」や「学習支援」

の方策に活用するようにした。

実践事例：個別のアセスメントシートの作成、スクールカウンセラーとの連携によるアセスメント、保護者とアセスメント面談の実施

② 2つ目の柱「居場所づくり」

利用生徒がSSRで安心して生活し、SSRを居場所として認識することで、登校日の増加や登校時間の延長を期待できると考えた。そこで、教室環境の整備をはじめとした「環境づくり」、登校するためのきっかけ作りをはじめとした「登校支援」を行うことにした。

実践事例：環境づくり（リーフレットの作成、教職員向けSSR通信の作成、教室内のレイアウトの変更等） 登校支援（SSR独自の行事を開催等）

③ 3つ目の柱「学習支援」

利用生徒や保護者がSSRに最も期待することの1つに「学習機会の確保・提供」がある。そこで、SWOT分析の結果を踏まえながら、以下の方策で学習支援を行うことにした。

- 学習する習慣がない→学習するためのきっかけをつくる→それぞれの生徒の「これなら頑張れる」部分を分析し、自分の好きな教科や得意な学習に思う存分、挑戦できる機会を確保する。
- 高校進学を希望する生徒たち→学習の基盤づくり（基礎・基本の定着）→「SSR専用の時間割」を作成し、時間割にしたがって各教科の教員がSSRに入り、学習支援を担当する。
- 自分の将来や進路について、目標をもつことができない→今後の生活や人生への3年間のイメージを抱かせる→田村地区の県立高等学校を見学する校外学習の実施。

(3) 成果と課題、今後の取組の方向性

- 架け橋プログラムは、個別のアセスメントを土台にしたことで、残りの柱も最大限の効果をあげた。教室や集団での活動に抵抗があっても、配慮された場であれば登校できる、取り組める生徒は一定数いる。SSRは、そのような生徒の実態を受け止め、一人一人の特性を多面的に把握・分析し、前例にない指導・支援も視野に入れ、その生徒に応じた場や環境を設定していくことが重要であった。
- 本実践では、複数の教職員体制で実施した内容で、大きな効果をあげた。その理由として、複数の教職員で丁寧に指導・支援にあたることができたこと、実施に至るまでチームでより生徒にとって最適な方法を相談し、練り上げることができたからだと考えられる。
- 教室復帰を目の前にした生徒たちが直面する課題として、「友人の目」や「どのように思われているのか気になる」といった不安や恐怖があった。SSRから「教室復帰」に向けた心理面における準備や支援を導入していく必要があった。
- 1年生の当初からSSRを利用している生徒の学習支援は、中学校の学習内容を1から学習するようになる。そのため、個別指導をはじめ、さらに充実した支援体制の整備が必要であった。
- ほとんどの生徒が、「学級に戻りたい」「授業を受けたい」といった希望をもっている。しかし、毎日のSSRの生活の中で、その希望を見失っていく生徒の様子も見受けられた。様々な取組の根底に、「教室復帰に向けて、同じ学校の中で、自分のペースで準備をしている」といった自覚をもたせる指導・支援が必要であった。

4 おわりに

人生100年時代と言われる中で、生徒一人一人が人生の中に体育やスポーツをどのように価値づけることになるのか、その起点に保健体育科の授業がある。したがって、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」に関しては、生徒の学習評価とともに形成的アセスメントを機能させ、教師として授業改善する姿勢をより一層重視していくことが大切になる。今後も、生徒とともに授業を

構想・展開していくスタンスで、授業実践を積み上げていきたい。

SSRにおいては、すべての生徒に最適な指導・支援、言い換えれば、正解となる指導・支援はないと言ってよいだろう。いかに、個人の実態に応じた、個別最適な指導・支援を模索していくかが重要であった。令和5年3月、文部科学省より「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策『COCOLOプラン』」が通知された。その中においても、SSRに大きな期待が寄せられ、設置の促進が推奨されている。今後も、SSR設置校の立場から、これまでの取組の成果や課題を発信していくとともに、SSRの設置がなされていない学校においても参考になる不登校支援、別室登校の指導・支援の方策について提供できるように研究を進めていきたい。

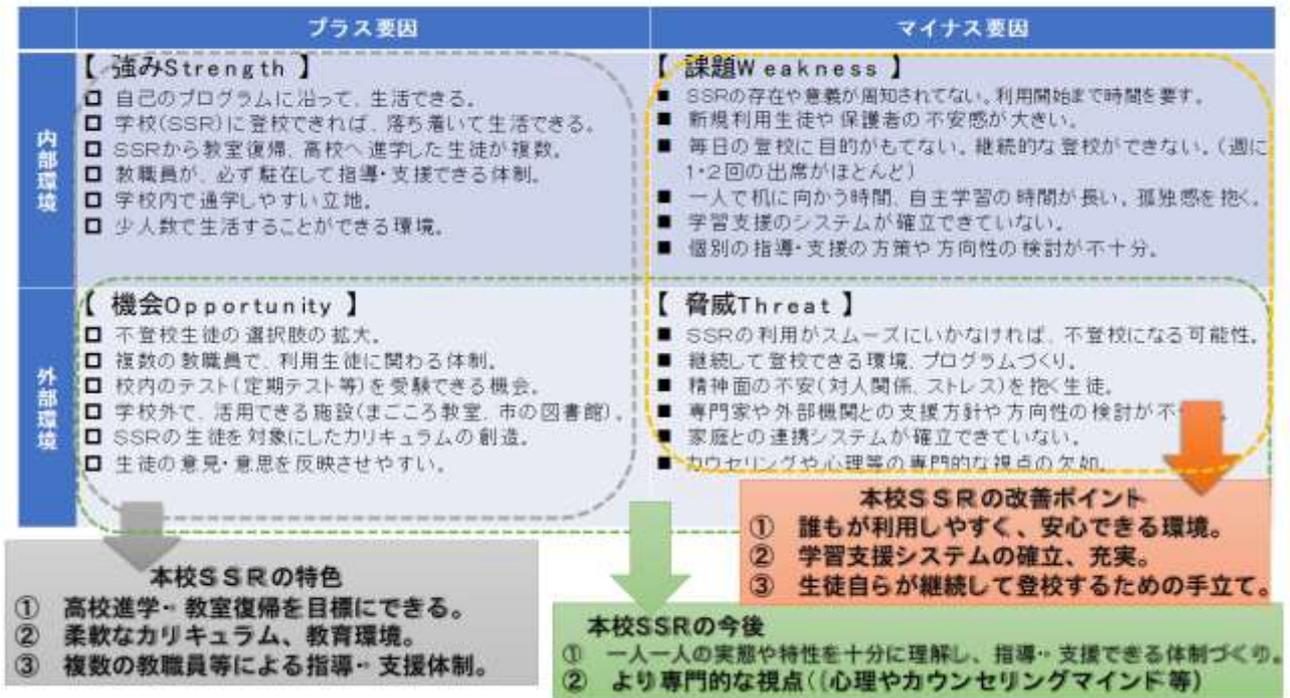


図1 SWOT分析の手法を用いて実態把握

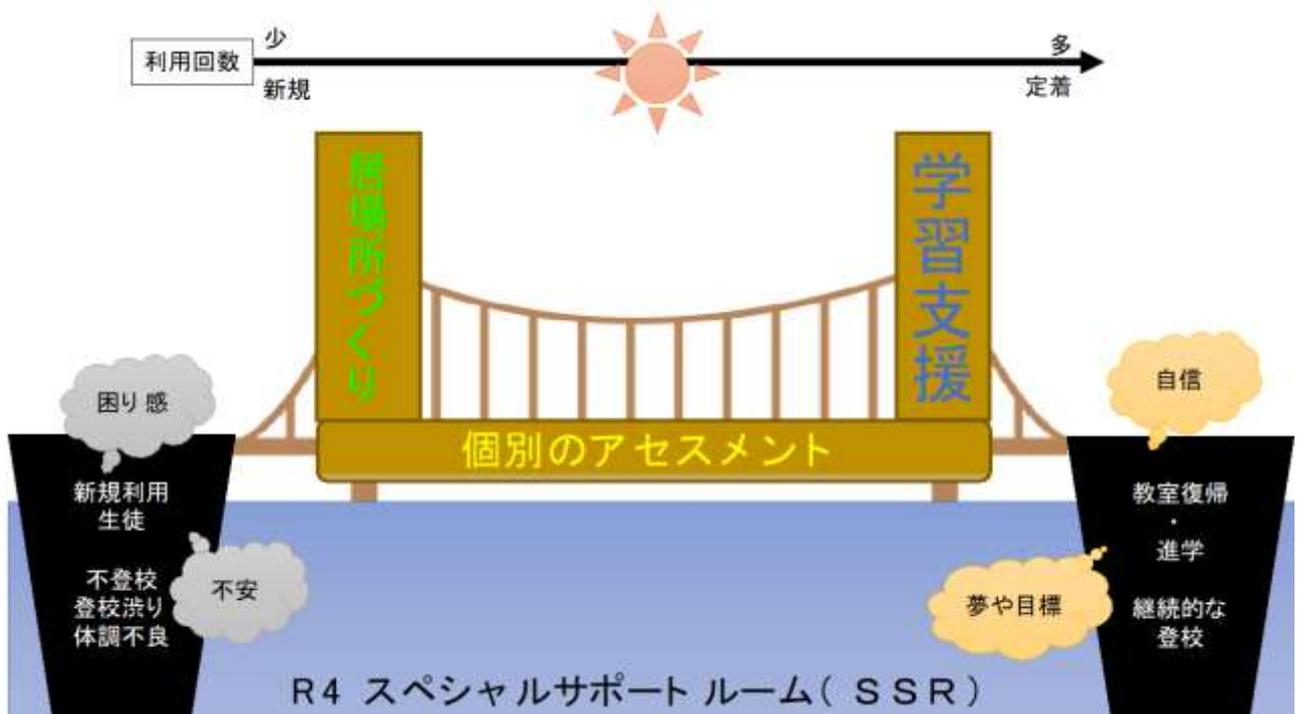


図2 3つの架け橋プログラムのイメージ図